水文・水資源学会誌
J. Japan Soc. Hydrol. and Water Resour.
Vol. 21, No.1, Jan. 2008 pp. 1 - 2

巻頭言

学会誌は学会そのものである

安成 哲三*

このたび，本学会から電子版英文レター誌 Hydrological Research Letters（略称HRL）を，学会誌の一環として発刊することが，理事会で正式に認められ，すでに創刊号の編集・発行作業は進行しつつあります．このレター誌の正式名称の決定にいたる過程ではいくつかの問題がありましたが，とにかく，このタイトルで出版することで決着いたしました．（この経緯についてのご説明は，本号にあります関係記事をご参照ください．）これまで，Hydrological Processes（略称HP）を特別号として不定期に学会として編集発行するはすでに学会の活動として行われてきましたが，本学会が，文字通りの英文の機関誌として，すべての編集・発行作業を行うジャーナルを持ったと言うことは，国際的な活動を進めるべき本学会としては，大変喜ばしいことであります．このHRLの発刊を進めてきた若手研究者を中心とする会員諸兄の努力と熱意に，改めて深い敬意を表する次第です．

このHRLが，国際的に定評の高い雑誌になるかどうかは，投稿される論文の質と，編集委員会の姿勢の両方に懸かっていますが，いい論文は，一方的なものではなく，投稿者と編集者のあいだの相互作用，あるいは協働作業で作られていくものであると信じています．日本から出されている英文の学会誌で，国際的に高い定評のあるジャーナルは，それほど多くはありません．その中でも，私が関与してきた別の学会の英文誌は，すでに50年以上の歴史があり，いわゆるインパクト・ファクターも比較的高い値を維持してきました．その主な理由は，会員研究者が，自信を持っておこなった研究成果を優先的にこの雑誌に投稿してきたことの長い蓄積に拠っています．確かに1960年－1970年代当時には，欧米の雑誌の投稿料が極めて高く，そう簡単に外国の雑誌に投稿できないなどの外的な背景もあったことは確かですが，より積極的な気持ちで自分たちのジャーナルに投稿しようという気概も強くあり，編集委員にも若手研究者の論文も含め，投稿された論文を良くしようという前向きで積極的な姿勢があったかとと思います．もちろん，いい論文を，すでに定評の高い欧米の雑誌に掲載することも，研究者として生き抜くためには必要であることは重々承知しているつもりですが，HRLという英文誌を学会として出すことを決めた以上，国際的に出すべきいい研究成果を，この英文誌に出したいという会員各位の姿勢と，そのような原稿をより良い論文にしようという編集委員の努力の両方が，HRLの発展には不可欠と考えます．その上で，諸外国の優秀な研究者に積極的な投稿を促す努力も必要かと思います．

学会の活動とは何かと改めて考えてみますと，その根幹のひとつは，学会誌の発行そのものであるといえます．特に，国際的に目に見える活動を行う学会としては，英文の学会誌の発行は，基本となる重要な事業です．アジアの多くの国々でも，多くの学会活動があり，英文誌を出している学会も多くあります．しかしながら，その大部分の雑誌は，残念ながら国際的な研究の世界（学界）では，あまり認められていないのが現状です．その主な理由は，その学会に所属する研究者が，いい論文はそ

*水文・水資源学会会長　名古屋大学地球水循環研究センター教授

の学会誌に投稿せず，定評のある欧米の雑誌にしか出さないという姿勢に起因していると私は感じています．その結果は，学会活動そのものの低下，弱体化につながっている場合も多いように見受けます．

いっぽうで，日本からの（あるいはアジアからの）発信を積極的に行うために，本学会として英文誌を独自で持つという視点も重要であると考えます．すなわち，すでに評価の高い欧米の雑誌に対し，単に追いつき追い越せ的な発想でだけではなく，研究に対する独自の発想を世界のコミュニティに発信していく場としても，学会誌を機能させることが重要であるということです．この機能をいかに維持し，発展させることができるかは，ひとえに編集に携わる方々の哲学と思想に委ねられています．たとえば，欧米的な視点でみるとリジェクトに値するような論文にも，日本（あるいはアジア）からの視点からすると，非常に重要な意味を持った論文というのも，場合によってはあるかもしれません．科学とは普遍性を追求するものであり，そんなことはありえないという人もいるかもしれませんが，地球の水循環や水問題を考えた時，欧米という地域や文化に強く影響を受けた価値観が，地球的視点から見た時に，必ずしも「普遍的」ではないことは多々あります．HRLの独自性を出していくことは，本学会がこれから，アジアでの水文学・水資源学をリードしていく学会として機能していくためにも，真摯に考慮すべき視点かと考えます．学会誌は，その意味でまさに学会活動そのものであるとも言えます．

HRLの門出を祝うとともに，今後の発展を，強く期待する次第です．